



東京学芸大学リポジトリ

Tokyo Gakugei University Repository

近代日本語の自称詞「わがはい」の共時的特性と動態について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2010-05-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 北澤,尚, 祁,福鼎, 趙,宏 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/107168

近代日本語の自称詞「わがはい」の共時的特性と動態について*

北澤 尚**・祁 福鼎***・趙 宏****

日本語・日本文学*****

(2009年8月31日受理)

要 旨

本稿は、近代日本語の自称詞「わがはい」の共時的な特性と通時的な変化の過程を明らかにするために、当時の文芸作品と総合雑誌『太陽』の記事から多くの用例を採集し、話し手の位相、発話場面の特徴、話し手と聞き手の上下関係、通時的な変容、他の自称詞との範列的な差異、などの多角的な視点から分析を行った。そしてさらに、話し言葉としてだけでなく、書き言葉としても使用された「わがはい」の使用実態と変化についても考察した。

その結果、話し言葉としての「わがはい」は、知識層と官員層の男性だけが使用していることが分かった。さらに、「わがはい」の待遇性の分析によって「日常的な場面で対等の聞き手に対する待遇」としての段階3の用例が全体の7割以上を占めていることが判明し、この用法を「わがはい」の中心的な待遇価値として位置づけることができる。なお、「わがはい」を通時的に観察すると、明治30年代以降には段階4と段階5でも使われていることがわかった。つまり、明治期後半にはその待遇価値が下方へと拡がっていったと言える。

また『太陽コーパス』による調査結果として、「わがはい」の使用は1917年までは増加しているものの、1925年では激減していることがわかった。「わがはい」の口語記事での使用率も、1901年、1909年、1917年において約1割に過ぎず、1925年では激減している。

以上の考察から、話し言葉において「わがはい」を特権的に使用していた官員層と知識層が、明治30年代以降、雑誌『太陽』の主要な執筆者層を担っていたとすれば、自称詞によって自らのステータスを誇示するためには、他の自称詞よりも「わがはい」が最も相応しかったと考えられる。しかしその一方で、自称詞「わがはい」は、同じく明治30年代以降、話し言葉としては対等の聞き手に対してだけでなく目下の聞き手に対しても拡張して使用されるようになって、特権的な階層性ばかりか尊大な印象をも与えるおそれが生じ、一部の政治家や軍人や啓蒙家たちを除いて、『太陽』の著者たちは次第に別の自称詞を代替的に使用するようになっていったことが考えられる。

キーワード：近代日本語、明治時代、自称詞、「わがはい」、雑誌『太陽』、太陽コーパス、位相、待遇価値、通時的変化、口語体、文語体

* Synchronic and Diachronic Studies of First personal pronoun “wagahai” in Modern Japanese

** 東京学芸大学教育学部（人文社会科学系 日本語・日本文学研究講座）所属

*** 大連外国語学院日本語学院講師

**** 大連外国語学院日本語学院准教授

***** 東京学芸大学（184-8501 小金井市貫井北町4-1-1）

0. はじめに

現代日本語では皆無と言ってよいほど使用されていない「わがはい」という語は、むしろ、近代日本語特有の自称詞としてよく知られている。「わがはい」と言えば、誰もがおそらく文豪夏目漱石の出世作『吾輩は猫である』(明治38~40年刊)という書名を思い浮かべるにちがいないだろうから。

しかしその一方で、「わがはい」が、例えば、近代において主にどのような場面で用いられ、かつ、いかなる待遇上の価値を持っていたのか、さらには、明治時代だけでも半世紀程の長さのある近代においてその用法がどのように変化していったのか、等については未だ不明な点が多く残されているようである。

そこで、本稿では、近代日本語の自称詞「わがはい」の使用上の特性を明らかにするために、当時の文献から多数の用例を採集し、話し手の位相、発話場面の特徴、話し手と聞き手の上下関係、通時的な変容、他の自称詞との範列的な差異、等の多角的な視点から分析を試みることにする。そしてさらには、話し言葉としてのみならず、書き言葉として使用された「わがはい」の実態についても論じてみようと思う。

1. 調査資料と調査対象

1.1 近代日本語の様相を明らかにするための多種多様な言語資料が存在するが、本稿では自称詞「わがはい」の使用実態をできるだけきめ細かく明らかにする目的で、まず、明治時代の文芸作品(戯作、小説、戯曲)と総合雑誌『太陽』の記事を主な調査資料とした。まず、調査資料とした文芸作品を以下に示す。

1. 『万国航海西洋道中膝栗毛』仮名垣魯文(明治3年), 2. 『牛店雑談安愚楽鍋』同上(明治4年), 3. 『東京日新聞』河竹黙阿弥(明治6年), 4. 『怪化百物語』高島藍泉(明治8年), 5. 『開明小説春雨文庫』松村春輔(明治9年), 6. 『鳥追阿松海上新話』久保田彦作(明治11年), 7. 『人間万事金世中』河竹黙阿弥(明治12年), 8. 『巷説兎手柏』高島藍泉(明治12年), 9. 『一読三歎当世書生気質』坪内逍遙(明治18年), 10. 『歐洲小説黄薔薇』三遊亭圓朝(明治18年), 11. 『英国孝子ジョージスミス之傳』同上(明治18年), 12. 『浮雲』二葉亭四迷(明治20年), 13. 『外務大臣』坪内逍遙(明治21年), 14. 『藪の鶯』三宅花圃(明治21年), 15. 『政党美談淑女の操』依田学海(明治21年), 16. 『政党餘談淑女の後日』同上(明治22年), 17. 『八重桜』三宅花圃(明治23年), 18. 『新浮世風呂』福地桜痴(明治27年), 19. 『金色夜叉』尾崎紅葉(明治30~35年), 20. 『くれの廿八日』内田魯庵(明治31年), 21. 『霜くづれ』同上(明治35年), 22. 『社会百面相』同上(明治35年), 23. 『小僧の旅行』五峯仙史(明治41年), 24. 『空薫』大塚楠緒子(明治41年), 25. 『そら娃』同上(明治42年)

(なお、上記1~25の底本は以下の通りである。『明治の文学』筑摩書房2002年刊=2, 『黙阿弥全集』春陽堂1925~1926年刊=3, 7, 『明治文学全集』筑摩書房1965~1967年刊=5, 6, 8, 15, 16, 17, 20, 21, 24, 25, 『圓朝全集』春陽堂1927年刊=10, 11, リプリント日本近代文学2005年刊=1, 9, 12, 名著復刻全集近代文学館1968年刊=19, 国立国会図書館近代デジタルライブラリー=4, 13, 14, 18, 22, 23)

上記の1~25は、江戸東京出身の作家による作品を中心とし、作品の会話の部分が口語であり、かつ明治時代の東京を主な舞台とした作品を特に選んだ。また、上記の1~25の全体を通して、男女双方の話し言葉の違いについて観察できるようにすることはもちろんであるが、異なる位相の人物の話し言葉が観察できるように種々の職業や階層の人物が登場する作品を優先して選んだ。

調査対象は上記1~25の文芸作品の会話の部分における自称詞「わがはい」である。

「わがはい」の表記には、当時「吾輩」「我輩」「吾が輩」等が見られるが、文芸作品の会話の部分話し言葉の資料として考察する場合には、漢字表記の違いを問題としない。原典からの引用を除いて原則として「わがはい」に統一して示す。ただし、底本が現代の全集本で自称詞に振仮名が付けられていない場合には、国会図書館近代デジタルライブラリーの本文などで確認した。

1.2 以上、近代日本語の自称詞「わがはい」を話し言葉として考察するために、明治時代の文芸作品を調査対象としたわけであるが、では一方、当時の「わがはい」は、書き言葉(文章)では書き手(著者)を表す自称詞としてどのように使用されていたのだろうか。もちろん近代の多種多様な文献を隈なく調べることが困難

である以上、できるだけその当時の中心的な資料によって、書き言葉としての「わがはい」の実態を明らかにしてみたいと考えるのは当然である。そこで、本稿では、国立国語研究所編(2005a)『太陽コーパス 雑誌『太陽』日本語データベース』博文館新社刊(以下、『太陽コーパス』と略称する)を活用する。

以下、雑誌『太陽』と『太陽コーパス』について解説する。国立国語研究所編(2005b)「太陽コーパス 雑誌『太陽』日本語データベース CD-ROM 用解説書」、同上(2005c)『国立国語研究所報告122 雑誌『太陽』による確立期現代語の研究 『太陽コーパス』研究論文集』博文館新社刊、に基づく。

『太陽』は、1895(明治28)年から1928(昭和3)年まで博文館から刊行され、当時最もよく読まれた月刊の総合雑誌である。内容は学術や産業の各分野を網羅し、啓蒙的かつ実用的なジャンルの文章が広く収められ、執筆陣も当代一流の各界の専門家が名を連ねている。また、読者層は、永峰重敏(1997)によれば「中学生から壮年層にわたる全国的な中産層読者を獲得していた」という。

次に、『太陽コーパス』は、現代日本語の書き言葉が確立したと言われる二十世紀初頭の日本語を調査研究するために国立国語研究所が作成した日本語コーパスであり、その本体は、雑誌『太陽』の1895(明治28)年・1901(明治34)年・1909(明治42)年・1917(大正6)年・1925(大正14)年の、各年12冊の全記事・全文(文字数で14451642字)を電子化した本文である。国立国語研究所編(2005c, 13頁)によれば「まず20世紀の始点として1901年を対象としてとった。言語の通時的な変化を段階的にとらえることができるようにし、またその中の一時点における共時的な記述にも堪えられる分量をそろえることを考えた。こうした考えから1901年を起点に8年刻みで、1909年、1917年、1925年を取り、さらに創刊年にさかのぼり1895年をとった。各年は臨時増刊号を除く12冊全号を対象にし、全体で60冊とした。」とのことである。

1.3 さて、ここで『日本国語大辞典 第二版』の「わがはい」の項目を見ると、「①われわれ(我我)の意で男性が用いた。われら。② ①から転じて単数に用いる。われ。私。余」とある。つまり、「わがはい」という語には単数の用法と複数の用法があることがわかる。

そこで今回文芸作品から採集した全542例の「わがはい」を調べたところ、単数の用法が525例と圧倒的に多いのに対して、複数の「わがはい」は17例だけであった。そのため、本稿では単数の用法を典型的用法と見なし以下は考察対象とし、複数の用法については周辺の用法と見なし考察から除くことにした。

例えば、次の(1)は、書生の須河が書生の桐山に対して自分を「わがはい」と呼んでいるので単数の用法であるが、(2)は、政党员である茨木が大臣の暗殺を計画する場面での発話であり、「我輩」は、話し手の茨木だけでなく、文脈上、同じ政治党员の岡崎・高田らをも含んでおり複数の用法と解することができる。

- (1) 我輩の部屋へ来て見イ。えい桃を買って来たぞ。(『一読三歎当世書生気質』138頁 須河→桐山)
- (2) 実に勇しき諸君の英気、假令事成らずして、戦死するとも、我輩の熱血は、長く人民の記念として、万世にその色を変ずべからず。勇めよ人々、励めよ人々。(『政党美談淑女の操』26頁 茨木→岡崎・高田ら)

なお、単数か複数かを判断し難い次の(3)のような例についても考察から除いた。

- (3) 新説は君の方が本元で我輩よりやア一步早いぢやないか、我輩新聞記者と稱すと雖ども日間の新事に至つては常に君等の通信を得て纔にこれを書き直し以て読者の責を塞くのみだ。(『新浮世風呂』58頁 新聞記者→編集記者)

この(3)は、新聞記者から編集記者への発話である。最初の「我輩」はその直前の「君」と呼応し、単数と判断できる。しかし、二番目の「我輩」は後ろの「君等」と呼応し複数の意味でも解釈できる一方、最初の「我輩」と同様に単数の意味による解釈の可能性も残るため、一義的な判断を保留せざるを得ない。

ただし、雑誌『太陽』の記事中の自称詞「わがはい」に関しては、記事の著者個人の主張であるのか、編集者全体を含めたいわゆる editor's We としての用法であるのか、判別し難い場合があるので、単数の用法と複数の用法とを区別して論じることをしていない。

その他に、「わがはい」に関する自称詞の複数形式として、「わがはいども」が3例、「わがはいら」が13例見られた。文例を以下に示す。

- (4) しかし、我輩共は幸ひに春秋は衣服の虱と共に富んで居るから其順番の廻つて来るのを俟て居られるが(『新浮世風呂』81頁 枯維→際物)
- (5) まづ我輩等とおなじやうに。此活社会に運動して。(『一読三歎当世書生気質』139頁 桐山→須河)

くり返しになるが、本稿では、上の(2)～(5)のような例を除き、文芸作品においては単数用法の「わがはい」全525例を以下の考察の対象とする。

2. 文芸作品における「わがはい」の位相

今回調査資料とした文芸作品全25作品中、14作品で「わがはい」が使用されていた。

まず、それらの「わがはい」全525例の使用者の性別について調べた結果、使用者は全て男性であり、女性の使用者は皆無であることがわかった。以下に例を示す。

- (6) 武士たるものが脱刀なすは本意にならずと我輩^{わがはい}は、開化に進まず捨てざるゆえに散髪ならず(『東京日新聞』268頁 甚内→長次)
- (7) 我輩^{わがはい}の愛女を、愈々輝一さんの嫁に貰うては呉れまいか、(『空薫』315頁 清村→輝隆)
- (8) 我輩^{わがはい}の部屋へ来て見イ。えい桃を買って来たぞ。(『一読三歎当世書生気質』138頁 須河→桐山)
- (9) 我輩^{わがはい}も読本には多少考案があるから貴公の相談に乗つても宜いがナ(『社会百面相』63頁 校長→店主)

上の(6)は、浪士の甚内から元奉公人の長次への発話である。(7)は、伯爵である清村から議員である輝隆への発話である。(8)は、書生の須河から書生の桐山への発話である。

次に、各作品における「わがはい」の使用者とその社会階層を調べると下の表1のようになる。

ただし、『社会百面相』の柴川については、本文では「貴族院議員、何々教育会々頭、△△学校長と、肩書きの澤山ある教育界一方の旗頭柴川靖三」とあるので、柴川は官員層でありかつ知識層にも属する。

ここで、祁福鼎(2007)に拠って、明治時代語の自称詞全般の使用実態に基づきつつ当時の社会階層を分類すれば、「官員層(男)」・「官員層(女)」・「知識層(男)」・「知識層(女)」・「上層町人(男)」・「上層町人(女)」・「下層町人(男)」・「下層町人(女)」・「奉公人(男)」・「奉公人(女)」・「芸者(女)」の11種類に分けられる。

表1によると、「わがはい」の使用者は全42人であるが、その位相は、大臣・政治家などのような官員層と士族・書生・教師・校長などのような知識層ばかりであることがわかる。換言すれば、それ以外の上記の9類の階層では全く使用されていないのである。全525例の内訳は、官員層が117例、知識層が408例である。

表1 作品別「わがはい」使用者と用例数

作 品	総用例数	使用者	階層	用例数
東京日新聞	1例	甚内	官員層	1例
怪化百物語	2例	殿様	官員層	2例
春雨文庫	2例	中	官員層	2例
巷説兎手柏	1例	青我	知識層	1例
当世書生気質	98例	須河	知識層	20例
		任那	知識層	5例
		守山	知識層	29例
		野々口	知識層	25例
		倉瀬	知識層	2例
		継原	知識層	16例
		岸	知識層	1例
黄薔薇	4例	書生	知識層	4例
浮雲	17例	本田	官員層	16例
		石田	知識層	1例
外務大臣	15例	才東	知識層	2例

		織部	官員層	2例
		蛸崎	知識層	11例
藪の鶯	1例	三太	官員層	1例
政党美談淑女の後日	8例	原作	知識層	5例
		長澤	官員層	1例
		頼国	官員層	1例
		茨木	官員層	1例
新浮世風呂	15例	政党	官員層	6例
		記者	知識層	4例
		書生	知識層	4例
くれの廿八日	56例	須山	知識層	49例
		五紋紳士	知識層	7例
社会百面相	303例	書生	知識層	19例
		主筆	知識層	5例
		先生	知識層	17例
		柴川	知識層	14例
		柴川	官員層	17例
		尾崎	知識層	7例
		大臣	官員層	18例
		秋葉	官員層	6例
		代議士	官員層	5例
		坤一	知識層	36例
		議員	官員層	17例
		政治家	官員層	18例
		記者	知識層	2例
		豊崎	知識層	122例
空薫	3例	清村	官員層	3例

3. 文芸作品における「わがはい」の待遇価値

3.0 人称詞に関する近世語の体系的な研究としては、山崎久之(1963)、小島俊夫(1974)、杉崎夏夫(2003)などの優れた成果を挙げることができる。しかし、本稿では、それらの研究とは異なり、各自称詞の待遇価値の段階性とその使用階層とを固定的に対応させつつ同時に考察するという方法を取らない。明治時代語の研究に関しては、ある特定の階層がある特定の待遇価値を担う自称詞を特に使用するという仮説が実態に即していないからである。そのために、本稿では使用階層の考察は、前節の通り、独立している。

結論だけを言えば、明治時代語研究では、話し手と聞き手の上下関係と発話場面の特徴の組み合わせとして、個々の自称詞の待遇価値を体系内に位置づける枠組の方が穏当である。(以上の方法論については、祁福鼎(2007)が詳しく論じている。)

以下、本稿における、待遇価値の分類の枠組について説明する。

まず、話し手と聞き手との上下関係については、「目上の聞き手に対する」「対等の聞き手に対する」「目下の聞き手に対する」という三つのレベルに分ける。

一方、発話場面については、「あらたまった場面」「日常的な場面」「ぞんざいな場面」という三つのパターンに分ける。ここで、この三つのパターンについて簡単に説明する。

- ・改まった場面……初対面の相手との会話や、依頼・懇願・謝罪などの発話行為を行うような場面
- ・日常的な場面……親しい相手との雑談や世間話のような、心理的緊張を伴わない場面
- ・ぞんざいな場面……高飛車な言い方をしたり罵ったりするような場面

そして、話し手と聞き手の上下関係（3種類のレベル）と、発話場面（3種類のパターン）を組み合わせると、次の表2のように、①～⑨の9種類の待遇の枠が成立する。

表2 待遇価値の分類の枠組（作業仮説）

発話場面 上下関係	改まった場面	日常的な場面	ぞんざいな場面
目上に対する	①	②	③
対等に対する	④	⑤	⑥
目下に対する	⑦	⑧	⑨

ただし、上の表2は、作業仮説として9種類に単純に分けただけであり、実際の自称詞の運用を観察すると、以下のような特徴が見出される。つまり、実際には、表2のような9種類の待遇価値に区分されるわけではないのである。

- 聞き手が目上である場合に、改まった場面（①）においても、日常的な場面（②）においても待遇表現を用いるなら、聞き手への敬意を払う段階、つまり段階1であると考えられる。換言すれば、目上に対しては、改まった場面においても日常的な場面においても、話し手は自分自身の品格や体面などを保持するために待遇表現を用いるというよりも、聞き手への敬意を表すために待遇表現を用いると考えられる。
- 改まった場面で、対等（④）及び目下（⑦）に対して待遇表現を用いる場合は、聞き手への敬意というより、主に話し手自身の品格や体面などを保持するために用いていると見られる。また、この④と⑦の場合に相手への軽い敬意を含む待遇表現が用いられることもある。
- ぞんざいな場面（③⑥⑨）では、円滑な人間関係を保とうとする意志が弱まる。そのため、罵る場合など、どのような関係の相手であっても区別なく同じような表現が用いられる。

以上の、三点を考慮に入れつつ、上の表2を整理し直すと、次の表3になる。以下、この五段階（段階1～段階5）の分類に基づいて、「わがはい」の使用状況を観察していく。

表3 待遇価値の分類の枠組

発話場面 上下関係	改まった場面	日常的な場面	ぞんざいな場面
目上に対する	1		5
対等に対する	2	3	
目下に対する		4	

3.1 段階1（改まった場面及び日常的な場面で目上の聞き手に対する待遇）

今回の調査では、段階1の「わがはい」が5例見られる。次にその文例を示す。

(10) 我輩^{わがはい}は以前四谷鮫ヶ橋に居りまして、旧幕の禄を食みし桑出兵右衛門の次男、同苗数衛と申します愚鈍の者で御座います、[中略]あれは爾来お見知り置かれて御教示下されば尚又悦ばしうござる。『歐洲小説黄薔薇』445頁 桑出→江沼

(11) 嬢様、どう云ふお疑ひか存じ升ぬが、内輪の事はどうなりとも表沙汰に成つた時の後日の難をあなた思し召し升ぬか [中略] 茨木氏の依頼などとは、我輩^{わがはい}夢にも知らぬ事（『政党餘談淑女の後日』138頁 長澤→露子）

上の(10)は、初対面の場面での書生の桑出から官員の江沼への発話である。また、(11)は、書生の長澤

から主人の娘である露子への発話である。

3.2 段階2（改まった場面で対等または目下の聞き手に対する待遇）

今回の調査では、段階2の「わがはい」が16例見られる。次にその文例を示す。

(12) 我輩如きの拙筆を過当の御誉に預つて酒宴を開くと仰らるゝ御厚志は有がたけれど甚だ恥入る儀で御座れば又近日に此方から御宅へ伺ひましたうへ（『巷説兎手柏』159頁 青我→萬治）

(13) どうも困却ですなア、先刻から我輩が舌を酸くしてお談事申すに、二言目には猶豫しろ、待て呉れとは餘りと云へば人を愚弄した咄でゐる。（『政党餘談淑女の後日』131頁 原作→荻江）

上の(12)は、初対面の場面での士族の青我から米商の萬治への発話である。また、(13)は、借金を取り立てる場面で、債権者の原作から債務者の荻江への発話である。

3.3 段階3（日常的な場面で対等の聞き手に対する待遇）

今回の調査では、段階3の「わがはい」が375例見られる。次にその文例を示す。

(14) 我輩が横着なら。君の如きはどろぼうだ。ダガ困るぜ察してくれ。（『一読三歎当世書生気質』100頁 野々口→倉瀬）

(15) 君、附かん事をいふが、我輩の愛女を、愈々輝一さんの嫁に貰うては呉れまいか、（『空薫』315頁 清村→輝隆）

上の(14)は書生の野々口から書生の倉瀬への発話である。また、(15)は伯爵の清村から議員の輝隆への発話である。

3.4 段階4（日常的な場面で目下の聞き手に対する待遇）

今回の調査では、段階4の「わがはい」が107例見られる。ただし、この107例はすべて『社会百面相』の用例である。

(16) 貴公が引受けて呉れ、ば我輩も大いに安心ぢや。實は我輩も軽々しく請合つたが、（『社会百面相』69頁 校長→教師）

(17) 貴公まだ修行が足りないといふもんだ。何でも宜いから我輩のいふまゝに任して置き給へ。（『社会百面相』91頁 大臣→新高等官）

3.5 段階5（ぞんざいな場面で、目上・対等・目下の聞き手に対する待遇）

今回の調査では、段階5の「わがはい」が22例見られる。ただし、『社会百面相』の中の二人の登場人物だけが使っている。

(18) 我輩は君を臍屑にして常に弁護しおるが社長が非常に君の伎倆を疑つて我輩も殆んど返答に当惑する場合がある。（『社会百面相』43頁 主筆→新人）

(19) 足下の両親は然るべき学者に…仕立て、呉れいと我輩に頼みおつたから、足下の簡次第で一応国許へ相談せにやならぬ。何ぢや、恐入る事は無い。足下も男子なら曲りにも堂々とやりおれ。（『社会百面相』50頁 先生→学生）

上の(18)は、主筆が過失を犯した新人を高圧的に注意する場面での発話である。また、(19)は、先生が学生を叱る場面での発話である。対称詞として対等以下の「足下」を用い、学生の動作に対して「～おる」を用い、命令表現「～おれ」も併用していることから、この場面の「わがはい」は尊大な印象も伴う。

以上、段階1～5の各段階における「わがはい」を観察してきたが、下の表4にまとめたように、特に「段階3（日常的な場面で対等の聞き手に対する待遇）」の用例が全体の7割を占めるといふ事実は注目に値するだろう。

表4 各段階における「わがはい」の用例数

段階1	段階2	段階3	段階4	段階5	合計
5例	16例	375例	107例	22例	525例

4. 「わがはい」の待遇価値の変化

前章までの考察によって、「わがはい」の使用者が専ら官員層と知識層であり、かつ、「わがはい」の中心的な待遇価値が「段階3（日常的な場面で対等の聞き手に対する待遇）」であることも明らかになった。では、このような「わがはい」の待遇価値に、明治時代という半世紀近い時間の中での変容は見られないのだろうか。本節では、「わがはい」の待遇価値を通時的な観点から改めて分析し直してみることにする。ここではまず、便宜的に、明治時代を、明治初年～9年＝Ⅰ期、明治10年代＝Ⅱ期、明治20年代＝Ⅲ期、明治30年以降＝Ⅳ期と区分する。そして、各時期における各段階の「わがはい」の用例数を示すと、次の表5になる。

表5 各時期における「わがはい」の各待遇価値の用例数

時期	段階					合計
	段階1	段階2	段階3	段階4	段階5	
Ⅰ期（明治初年～9年）	0	5	0	0	0	5
Ⅱ期（明治10年代）	4	1	98	0	0	103
Ⅲ期（明治20年代）	1	7	47	0	0	55
Ⅳ期（明治30年代）	0	3	230	107	22	362
合計	5	16	375	107	22	525

取り上げる作品数を増やしていけば、「わがはい」の用例数も増えるだろうから、Ⅰ期からⅣ期へと「わがはい」の使用が増えているなどと言うつもりはない。むしろ、表5を見て気付くことは、まず、Ⅰ期の全5例の「わがはい」が全て段階2の用例であることである。そして、Ⅱ期とⅢ期では、「わがはい」は段階1・段階2・段階3へ拡張する。さらに、Ⅳ期になると、段階1が消え、段階3を中心としつつ、段階4と段階5の用例も少なからず見られるようになり待遇価値に変化が生じることである。

つまり、明治時代の「わがはい」は共時的には段階3を典型的な用法としているように見えるが、通時的に分析し直してみると、時代が下るにつれてその待遇価値は次第に下方へと拡がっていったことがわかる。もちろん今回の調査分析では、明治30年代以降の段階4及び段階5の用例が、内田魯庵『社会百面相』（明治35年刊）にしか見られないという資料上の限界がある。しかし、明治元年東京生まれの小説家が、明治30年代の諸々の職業や階層の矛盾を風刺的に活写した『社会百面相』において、官員層と知識層の人物に段階4と段階5の「わがはい」を使用させているという事実は軽視できないと考える。

5. 雑誌『太陽』における「わがはい」の使用実態

5.1 ここでは目を転じて、近代日本語の書き言葉（文章）における「わがはい」の実態を明らかにするために、雑誌『太陽』の記事における用例を観察する。

『太陽コーパス』によって「わがはい」（実際には「吾輩」「我輩」「吾が輩」「我が輩」「わが輩」「わがはい」の各文字列による検索である）を検索すると、「吾輩」724例、「我輩」594例、「吾が輩」22例、「我が輩」2例、「わが輩」0例、「わがはい」0例である。以下では、主要な表記である「吾輩」「我輩」に限って考察を行う。

まず、最初に、「吾輩」「我輩」の各年代別の用例数を調べ、さらに「吾輩」「我輩」が使用されている記事が文語体か口語体であるかの分析も記事タグによって行った。これは、かつて見坊豪紀（1957）が、1897年～1907年の『太陽』を用いて口語文の使用率の変化を調査し、当初は文語体が大部分であったのが、年次を追うごとに次第に口語体が増えていき、文語体から口語体への変化の過程をとらえることができると述べていることによる。

ただし、その際、それらの記事の中には、著者以外の人物が用いた言葉を引用した部分が含まれていることがあるので、引用箇所における「吾輩」「我輩」の用例は除外した。また、総合雑誌『太陽』には小説も掲載

されており、小説の登場人物の会話における「吾輩」「我輩」の用例も除外した。

その結果の数値が次の表6である。括弧の中の数値は（文語+口語+不明）である。つまり、合計欄の「1127」例の内訳として、「文語体での使用263例+口語体での使用853例+記事タグ不明11例」の意味である。

表6 年次別「吾輩」「我輩」の用例数

	「吾輩」	「我輩」	合計
1895（明治28）年	30（30+0+0）	43（41+0+2）	73（71+0+2）
1901（明治34）年	123（95+27+1）	107（3+103+1）	230（98+130+2）
1909（明治42）年	62（1+61+0）	198（56+141+1）	260（57+202+1）
1917（大正6）年	378（36+338+4）	118（1+117+0）	496（37+455+4）
1925（大正14）年	38（0+37+1）	30（0+29+1）	68（0+66+2）
合計	631（162+463+6）	496（101+390+5）	1127（263+853+11）

まず、上の表6の合計欄を見ると、「吾輩」も「我輩」も文語体での使用率が約2割、口語体での使用率が約7割であり、両表記に用法上の違いは認められない。また、1917（大正6）年までは全体として増加傾向が見られるのに対して、1925（大正14）年には激減していることにも注目したい。

5.2 次に、口語記事の中に「吾輩」「我輩」がどれほど含まれているかを年次別に分析する。その際、同一の口語記事において「吾輩」や「我輩」が複数回使用されている場合にも使用件数1と数える。これは、国立国語研究所編（2005c, 28頁）に示されている『『太陽コーパス』の年次別文体別記事数』の数値を利用するための措置である。念のために、同上（2005c）の「総記事数」「口語記事数」及び「口語記事率」（総記事数に対する口語記事数の割合）を表7に添付する。その上で、「吾輩」及び「我輩」を使用する口語記事数とその年次の全口語体記事数に対する使用率を算出すると、次の表7の上段のようになる。

表7 「吾輩」及び「我輩」の口語記事での使用率と、『太陽』コーパスの口語記事率

	1895（明28）年	1901（明34）年	1909（明42）年	1917（大6）年	1925（大14）年
吾輩・我輩の口語記事数と使用率	0 (0.0%)	21 (12.9%)	28 (7.4%)	49 (13.8%)	22 (2.6%)
総記事数	729	635	652	504	889
口語記事数	39	168	376	355	835
口語記事率	5.3%	26.5%	57.7%	70.4%	93.9%

表7を見ると、1925（大正14）年ではそれ以前に比べて「わがはい」の口語記事における使用率（含有率）が激減していることがわかる。

また、1901（明治34）年、1909（明治42）年、1917（大正6）年においても、口語記事での使用率は1割程度に過ぎず、当時の論説文や啓蒙的・実用的文章において「わがはい」が頻用されていたとは言えない。

なお、一口に口語記事と言っても実は「名家談叢」は談話筆記に近いし、「論説」と言っても、例えば「清国の真相 清国の革命党」（1909年1月号）の著者欄には「犬養毅（談）」と記されているので、上記の「わがはい」の用例を精査していくと更に数値は減少するにちがいない。ただし本稿では、土屋信一（2004）の述べるように「演説講演体・論文体というような区別をせず、口語体の文章を一括して取り上げていくことにする。実際問題として講演速記をそのまま掲載したのか、どの程度手を加えたのか、明らかでないものも多く、識別は困難である。」（323頁）からである。（同様の記述が田中牧郎2004にもある。）

すでに第4章で見たように、「わがはい」は話し言葉としては明治30年代以降、段階3を中心的用法としつつも急速に待遇価値を下方へと拡張していった。そして本節では、当時の文章における著者を表す自称詞として明治30年代以降使用されているものの、結局のところ、「わがはい」は近代日本語の自称詞として中心的地位を得られなかったことが判然とした。

では、このような「わがはい」の動態的变化がいかなる要因によって生じたのか、もっと詳しく言えば、「わがはい」のどのような共時的特性によってもたらされたものなのか、次章でさらに考えてみたい。

6. 「わがはい」と他の自称詞との範列的差異

6.0 今しがた提示した問題を論じるためには、単に「わがはい」だけではなく、当時の他の自称詞をも取り上げて体系的な視点から考察することが求められる。なぜなら、言語という存在がいつでもそうであるように、「わがはい」も他の自称詞群との範列的關係 (paradigmatic relation) の中でのみ価値を持っているからである。

なお、この問題の具体的解決のためには、明治時代の自称詞の体系を精緻に記述した祁福鼎 (2007) がきわめて有効である。その5,000例を超える文献の悉皆調査によれば当時の自称詞は全50種類とのことであるが、その中でも高頻度の「わたし」「ぼく」「わたくし」「おれ」(以下、「わがはい」と同じく漢字表記の違いを捨象し平仮名で表記する。)と「わがはい」とを比較することにする。以下の自称詞に関するデータは同上の祁 (2007) に基づく。

6.1 まず、「わたし」は明治時代には、本稿第2章の11種類の全ての階層の男女が使用している。祁福鼎 (2007) の自称詞の総データ (延べ語数) において自称詞の男性話者の総用例数が女性話者の総用例数よりも多いのであるが、「わたし」の使用者が男女比で1:4 (221例:913例) であることから、女性の方がはるかに多く使用していることが分かる。なお、基本的な待遇価値は、本稿における段階2である。

6.2 次に、「ぼく」は、『当世書生氣質』の芸者の豊と『浮雲』のお勢が冗談で口にする2列を除けば、男性専用の自称詞である。「僕」は明治前期では官員層・知識層・上層町人層に集中しているが、明治30年以降、それまで使用していなかった下層町人層まで拡がっていく点が特徴的である。なお、基本的に「ぼく」は「日常的な場面で対等の聞き手に対して」使用される。

6.3 「わたくし」は、「わたし」と同じく全ての階層の男女が使用している。総用例数の男女比が1:1 (413例:450例) である点も、「わたくし」に準じて考えることができる。ただし、「わたくし」は「わたし」より待遇価値は高く、主に段階1の「あらたまった場面で目上の聞き手に対して」主に使用される。

6.4 「おれ」も「わがはい」と同様、男性専用の自称詞ではあるが、使用者の中心は町人層である。また、あらたまった場面での使用例は皆無である。そのため、尊敬語や謙譲語と共起した例もない。つまり、段階3・4・5を使用域とする自称詞である。

6.5 自称詞は「わがはい」の他にも、以上のような「わたし」「ぼく」「わたくし」「おれ」なども当時存在していたにもかかわらず、では、なぜ、「わがはい」が雑誌『太陽』の記事 (論説、商業世界、政治、政治時評、輿論一斑など) において書き手を表す自称詞として使用されているのだろうか。

まず「おれ」はぞんざいであるので論外である。次に、話し言葉としての「ぼく」も先述したように当時広く使用されていたが、明治30年代以降の下層への拡がり方が、論説等の文章にはふさわしくなかったと考えられる。さらに、「わたし」も女性語的なニュアンスを伴うことがあったとすれば、「わがはい」の他に使えるような自称詞は、「わたくし」だけになる。今、明治時代の書き言葉としての「わたくし」を十全に考察するだけの準備はないが、『太陽コーパス』で使用されている自称詞「私 (わたくし)」は数千例ほどある。

第2章の分析結果をふまえて考えれば、話し言葉における「わがはい」を特権的に使用していた官員層と知識層が、明治30年代以降、雑誌「太陽」のような活字メディアの執筆者層を担ったとすれば、自称詞によって自らのステータスを誇示するためには、他の自称詞よりも「わがはい」が最も相応しかったと考えられる。しかし、その一方で、自称詞「わがはい」は、同じく明治30年代以降、話し言葉として対等の聞き手に対する品格保持のはたらきから目下の聞き手に対する用法へと拡張していった。ただし、「わがはい」の特権的な階層性に加えて尊大な印象をも与えるとき、一部の政治家や軍人、啓蒙家たちを除いて、『太陽』の記事の著者たちは次第に別の自称詞を選択するようになっていったことが考えられる。

7. まとめ

本稿はこれまで、近代日本語の自称詞「わがはい」を話し言葉と書き言葉の両面から考察してきた。「わがはい」の話し言葉としての特徴を明らかにするためには明治時代の文芸作品を資料とし、一方、書き言葉としての特徴を明らかにするためには『太陽コーパス』を活用した。そして、「わがはい」の共時的特性を明らかにしつつ、明治30年代以降の用法の変容に関しても考察を試みた。

以上の結果、本稿で明らかにした点を箇条書きふうにとまとめておく。

- 明治時代の「わがはい」は、単数としての用法が圧倒的に多いが、複数としての用法も存在した。他に、複数形式としての「わがはいども」「わがはいら」の語形も見られた。
- 明治時代の文芸作品の会話の部分の調査における「わがはい」の全用例数525例の内訳は、知識層408例と官員層117例である。つまり、明治時代の「わがはい」はすべて知識層と官員層に限って使用されており、その他の階層の使用は皆無である。
- 同上の「わがはい」の全525例のうち、「日常的な場面で対等の聞き手に対する待遇」である段階3に375例が集中しており、全体の7割以上を占めることから、「わがはい」の中心的な待遇価値は、本稿における段階3に位置づけられる。
- 同上の「わがはい」は、共時的には段階3を典型としているが、通時的に分析すると、明治30年代以降には段階4と段階5でも使われるようになる。つまり、明治時代の後半にその待遇価値がしだいに下方へと拡がっていったと言える。
- 『太陽コーパス』による調査分析の結果、「わがはい」の文語体での使用率が約2割、口語体での使用率が約7割であった。また、「わがはい」の使用は1917（大正6）年までは増加しているものの、1925（大正14）年には激減している。
- 『太陽』における「わがはい」の口語記事での使用率は、1901（明治34）年、1909（明治42）年、1917（大正6）年においても約1割に過ぎず、1925（大正14）年では激減していることがわかった。このことから、当時の論説文や啓蒙的・実用的文章において、「わがはい」が頻用されていないことが分かった。
- 以上の考察から、話し言葉において「わがはい」を特権的に使用していた官員層と知識層が、明治30年代以降、雑誌『太陽』の主要な執筆者層を担ったとすれば、自称詞によって自らのステータスを誇示するためには、他の自称詞よりも「わがはい」が最も相応しかったと考えられる。しかしその一方で、自称詞「わがはい」は、同じく明治30年代以降、話し言葉としては対等の聞き手に対してだけでなく目下の聞き手に対しても拡張して使用されるようになって、特権的な階層性だけでなく尊大な印象をも同時に与えるおそれがあり、一部の政治家や軍人や啓蒙家たちを除いて、『太陽』の著者たちは次第に別の自称詞を代替的に使用するようになっていったことが予想される。

最後に一言。明治38年1月号の雑誌『ホト、ギス』に掲載された『吾輩は猫である』の「吾輩」とは、どのような含意を持っていたのだろうか。猫の視点からの一人称の語りを講演速記や談話速記の延長線上に位置づけるなら、人間一般を見下し諷刺する猫の尊大さを強く印象づけるには「わがはい」は最適であったことだろう。また、猫の使用する「わがはい」は、明治30年代後半における総合雑誌『太陽』等における政治家や啓蒙家たちによる講演速記や談話速記の語り口を喚起させたはずである。ちなみに主人の珍野苦沙弥が英語教師で知識層に属するように自らも知的特権階級と思いが上がっているのか、猫は三毛子に「先生」とよばれて悦に入る。もちろん作家の創作上の意識は明らかにできないが、漱石にとって「猫」が自らを語る時、その自称詞は範列的關係にある他の語ではあり得ず、「わがはい」が最も相応しい自称詞であると確信していたことはまちがいない。

参考文献（五十音順）

- 祁 福鼎（2007）『明治時代語における自称詞の研究』明治大学大学院 博士学位論文
 見坊 豪紀（1957）「明治時代の文語文」『言語生活』74
 小島 俊夫（1974）『後期江戸ことばの敬語体系』笠間書院

- 国立国語研究所編 (2005a) 『太陽コーパス 雑誌『太陽』日本語データベース』博文館新社刊
- 国立国語研究所編 (2005b) 『太陽コーパス 雑誌『太陽』日本語データベース CD-ROM 用解説書』
- 国立国語研究所編 (2005c) 『国立国語研究所報告 122 雑誌『太陽』による確立期現代語の研究 『太陽コーパス』研究論文集』博文館新社刊
- 小松 寿雄 (1980) 「オレ・ソチ・ソナタ・ワツチ・ワタイ—明治東京語女性人称詞の一考察—」『国語語彙史の研究 十九』和泉書院
- 杉崎 夏夫 (2003) 『後期江戸語の待遇表現』おうふう
- 田中 牧郎 (2004) 「雑誌『太陽』創刊年 (一八九五年) における口語文」『国語論究11 言文一致運動』(明治書院) 所収
- 土屋 信一 (2004) 「雑誌記事の言文一致—明治二十八年『太陽』の場合—」同上所収
- 彦坂 佳宣 (1983) 「〈語誌〉おれ」『講座日本語の語彙 第9巻』明治書院
- 飛田 良文 (1974) 「明治初期作品の敬語」『明治大正の敬語 敬語講座⑤』明治書院
- (1992) 『東京語成立史の研究』東京堂出版
- 松村 明 (1957) 『江戸語東京語の研究』東京堂出版
- 山崎 久之 (1963) 『国語待遇表現体系の研究』武蔵野書院

Synchronic and Diachronic Studies of First personal pronoun “wagahai” In Modern Japanese

KITAZAWA Takashi, QI FuDing, ZHAO Hong

Department of Japanese Linguistics and Japanese Literature

Abstract

In order to make sure of the synchronic characteristics and the process of diachronic changes of first personal pronoun “wagahai” in Modern Japanese, the paper has selected some examples of “wagahai” from literature works and the reports of comprehensive magazine <<The sun >>. The paper has made an analysis of speakers’ phases ,characteristics of speech atmosphere, the relationships between speakers and listeners, the diachronic changes and the differences among those first personal pronouns from many angles. At the same time, the paper has also observed the usages and changes of “wagahai” as both the written and spoken word.

According to the analysis, we got to know that as a spoken word, “wagahai” was only used by intellectuals and officers. Further more, according to the analysis of treatment of “wagahai”, we could prove that the examples of phase 3 of “the treatment to the equal listeners in daily life” occupied more than 70% of the whole, while the usage could be positioned as central treatment values of “wagahai”. If we continuously observed “wagahai”, we made clear that, after Meiji 30 years it was also used in phase 4 and phase 5. In other words, in late Meiji Times, treatment values were gradually expanded into the lower classes.

Next, through the research conclusion of <<The sun corpus>>, it is clear that the usage of “wagahai” had increased in 1917 while in 1925 it dropped dramatically. The percentage of “wagahai” in colloquial reports was only approximate 10% in 1901, 1909, 1917 and in 1925 it dropped dramatically.

Above all, if we supposed that the officers and the intellectuals who had the priority to use “wagahai” were the main writers for magazine <<The sun>> after Meiji 30 years, they wanted to show off their own status and it was better to use “wagahai” rather than other first personal pronouns. On the other hand, after Meiji 30 years, the first pronoun “wagahai” as a spoken word was used by not only the equal listeners but also the lower class listeners. It can be predicted that “wagahai” would impress others by an imagine of exclusivity and arrogance, so except some politicians, soldiers, torchbearers, writers of <<The sun>> gradually used the other first personal pronoun instead of “wagahai”.

Key words : Modern Japanese, Meiji Times, First personal pronoun “Wagahai” Magazine <<The sun>>, The sun corpus, Diachronic changes, Colloquial style, literary style

近代日语自称词“わがはい”的共时特性和动态变化研究

北泽尚·祁福鼎·赵宏

日本語・日本文学

摘要

为了明确近代日语自称词「わがはい」的共时特性和历时变化的过程，本论文从当时文艺作品和综合杂志《太阳》的报导中选取了「わがはい」的实例，对于说话者的语相，说话场合的特点，说话者与听话者的上下级关系，历时的变化以及和其它自称词的差异等方面，从多个角度进行了分析。同时，对作为口语和书面语使用的「わがはい」的使用实态及变化也进行了考察研究。

据调查结果显示，口语「わがはい」只被知识分子和官员阶层的男性所使用。根据对「わがはい」的待遇性进行的分析，作为“在日常生活中，对于地位相等的听话者的待遇”阶段3的用例占全体的70%以上，我们可以将这个用法定位为「わがはい」中心待遇价值。通过对「わがはい」的历时观察，表明明治30年以后，「わがはい」一词也用在阶段4和阶段5中。也就是说，在明治后期，待遇价值向低阶层逐渐扩散。

根据《太阳集》的调查显示，虽然「わがはい」一词的使用率到1917年一直在增加，但是1925年，其使用率急剧下降。在「わがはい」的口语报导中，其使用率在1901年，1909年，1917年只不过占10%左右，在1925年更是锐减。

从以上研究结果来看，可以认为在口语中特权地使用「わがはい」的官员和知识分子，在明治30年代以后，如果是担当杂志《太阳》的主要执笔者的话，为通过自称词来显示自己的地位，那么比起其它的自称词，「わがはい」是最为合适的了。但是另一方面，我们也可以推测，自称词「わがはい」在明治30年代以后，作为口语扩展为说话者不仅仅对于关系平等的听话者，对于比自己地位低的听话者也使用，容易给人一种不止是特权的阶层性还有一种骄傲尊大的印象，所以除了一部分政治家，军人，启蒙家之外，《太阳》的编者逐渐用其它的自称词来代替使用「わがはい」一词。

关键词：近代日语，明治时代，自称词，「わがはい」，杂志《太阳》，太阳集，语相，待遇价值，历时变化，口语体，书面体